引きこもり・ゴミ屋敷・ヤングケアラー

社会の難問解決のヒント

および「難問にも対応できる福祉システム」のあり方

＜特に重要なポイント＞

①住民流に転換しないと難問は解決しにくい。

②ケ型活動が普及すると、難問解決がやや容易になる。

③ケ型活動にしないと「世界一やさしくない国」から抜けられない。

④当事者の尊厳を守る福祉が、難問解決への近道になる。

⑤自助教育によって、当事者を助けられ上手にしよう。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

本冊子は２つのテーマを取り上げてある。

１つは社会の難問と言われるテーマーここでは①引きこもり、②ゴミ屋敷、③ヤングケアラーの３つに絞ってあるが、それを解決するためのヒントを提供しようとしている。

２つ目は、これらの難問を解決できる福祉システムのあり方を提示してある。

今の福祉は、担い手主導のやり方で固まってしまっているので、その正反対の対応を求められる当事者主導のあり方には関心を持たれないかもしれないが、じつはこの当事者主導が、難問対応型の取り組み方なのだ。

あまりにも異なる２つの対応法をどのように両立させていったらいいのかといえば、残念ながらまだ、これだと明確に言えるほど整理された解決策があるわけではないが、いずれはこれにもチャレンジしたいと思っている。

なお、表紙に①～⑤の＜特に重要なポイント＞をあげてある。本文中で、これらに関連する部分は赤字で解説し、どのポイントと関連しているか、①～⑤の番号で示してある。

目次

1.難問解決のヒント／４

⑴「ひきこもり」／４

⑵「ゴミ屋敷」／７

⑶「ヤングケアラー」／９

2.難問にも対応できる福祉システムとは？／１２

⑴担い手主導型と当事者対応型をどう両立させるか？／１２

⑵住民への福祉教育を自助教育中心に／１４

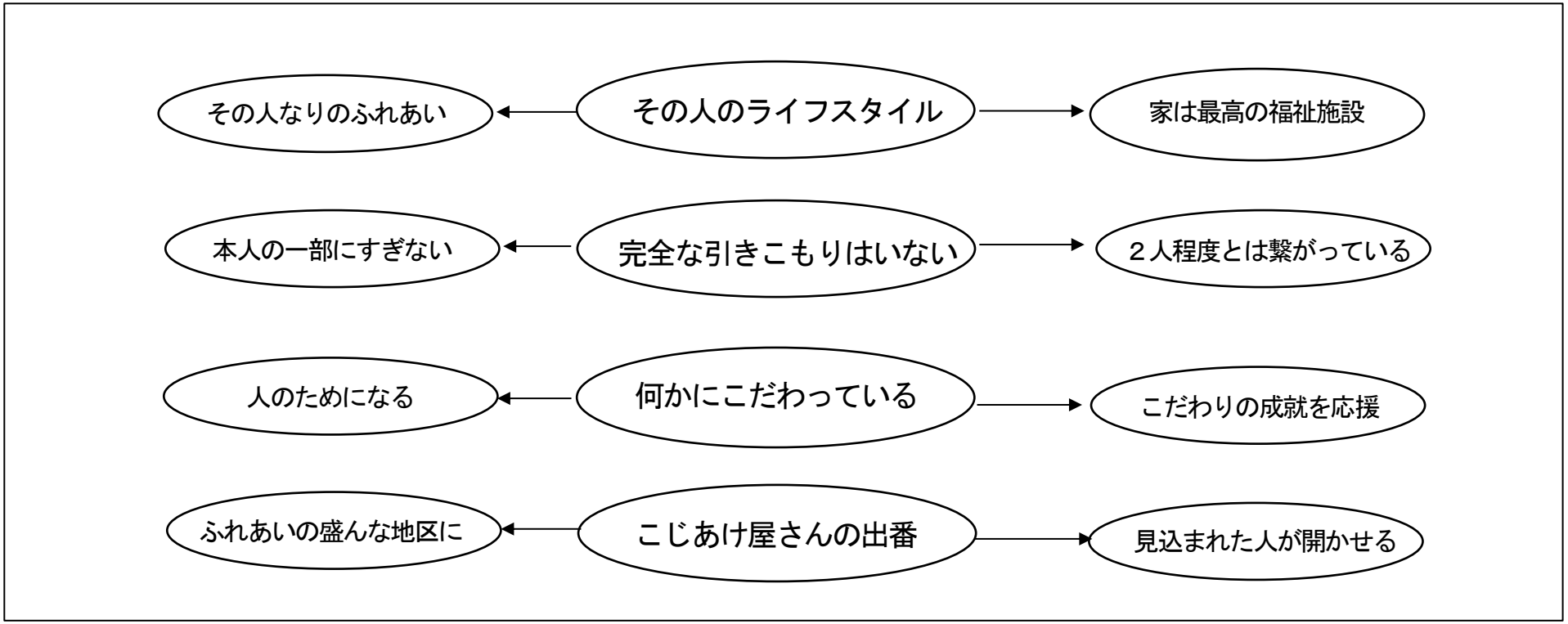
⑶ハレ型活動からケ型活動への移行も／１５

⑷住民流とは「自助＋当事者主導型＋ケ型活動」。コロナにも強い／１７

⑸社会福祉関連法がこだわる「人間の尊厳を守る」超福祉へ／１７

1.難問解決のヒント

⑴「ひきこもり」



①日本という国は、一般とは異なる生き方をする人を異端視する傾向がある。まずは、それぞれの人がその人の性格の反映としてのライフスタイルを持っていると捉え、そこから対応を考えていくべきだ。ある青年と引きこもりの話をしていたら、彼がこう言い出した。「僕もある意味では引きこも

りなんでしょうね．でも、**今は家にいても、パソコンやスマホで、世界中の人と触れ合えます」。**

②ある地区で８０５０と思しき母子がいた。息子は特に仕事を持っているわけでもない。介護をしているかと言えば、ある程度はしているだろう。なんとなく曖昧な存在である。しかし**彼は見方によれば、この家の家庭管理、家庭介護、家事仕事などを一手に担っているとは見えないか。そして家という場所は、居心地がいいのだ。引きこもりの人にとって、家は福祉施設のような所なのだ。心地良くてはいけないだろうか。**つまり、まずは本人の側から事態をポジティブに見てみる必要があるのではないか。

③それと同じ見方をしてみると、例えば**人との関わり合いはイヤだが、犬や猫ならいいという人もいる**。地域で変わった人と見られている中に、カラスの餌付けをしている男性がいた。草だらけの家に住んでいる人もいる。その人にとってはこれもふれあいなのかもしれない。そこからまずその人にアプローチする必要があるのだ。

④支え合いマップ作りを主唱するとともに、この３０年間、たくさんの引きこもりの人の事例を見てきたが、敢えて言うと、完全な引きこもりというケースはめったにない。ある地域で**孤独死した一人暮らしの女性についても、住民は誰ともつながっていなかったと言うが、「それでも誰かを見込んでいたのでは？」と、しつこく聞いて言ったら、やっぱり２人いた。なぜそれが見えないのかというと、担い手の側から見ているからだ。**相手の側に立って見直してみると、やっぱり２人いたのである。特に、斜向かいに住んでいる人には「何かあったらお願い」とまで言っていたが、その人が引っ越してしまっていたのだ。誰でも命は大事だ。そのことを忘れてはいけない。その見込まれた相手を探して、その人を通せばつながるはずなのだ。

⑤それと、**「引きこもり」などの問題はその人を構成する要素の一部分であって、全てではない**。あるマップ作りで、ゴミ屋敷で仕事に行く以外は引きこもっているという中年の女性がいた。誰かが家に入ろうとすると、大声で怒鳴り散らすという。しかし彼女の働き口を尋ねたら、なんとヘルパー

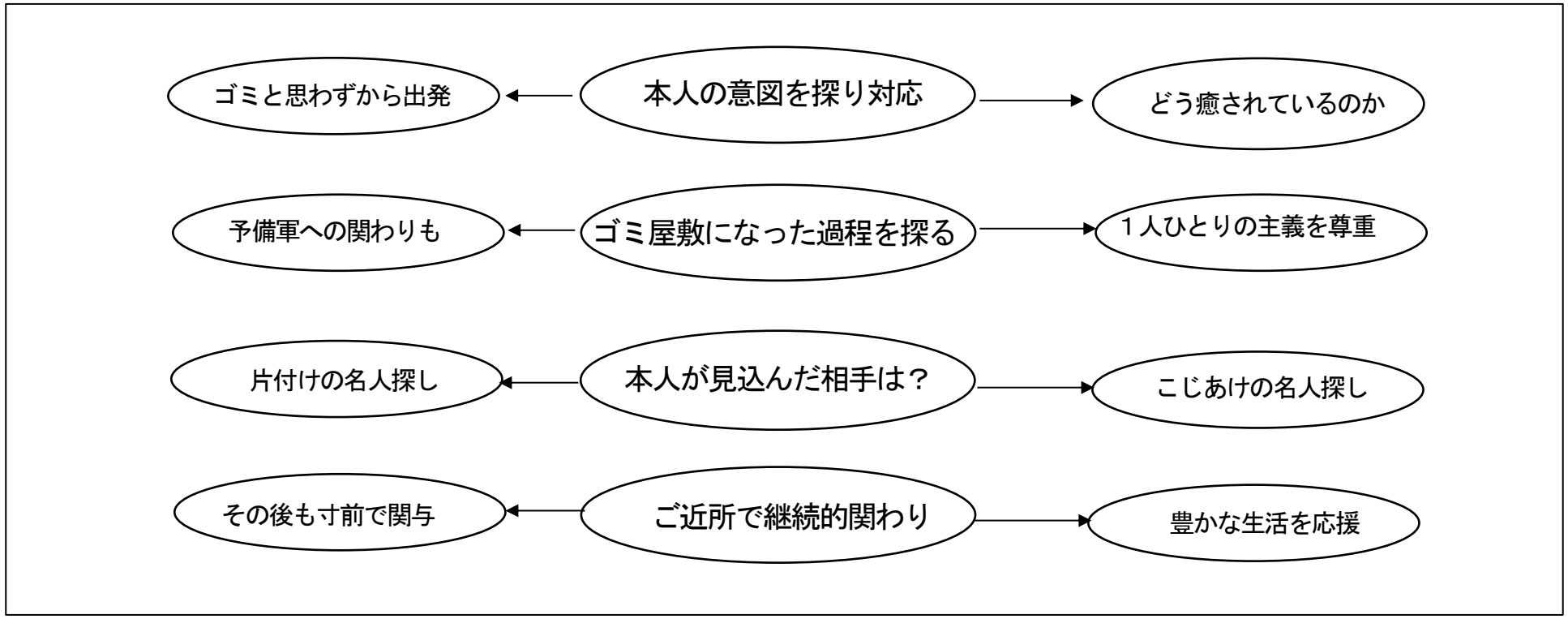
をしているという。それでヘルパーができるかの聞くと、ヘルパーをしている時は、普通なのだという。このように２つの顔を持っている人もときどき見かける。

⑥今言ったように、その人なりに、２つや３つの顔を持っている人もいる。その１つが、何かにこだわっている顔だ。**引きこもっているというよりは、あることに夢中になっている。**引きこもりであるのは確かなのだが、本人からしたら、ふれあいなんぞよりは、こっちに夢中になっているだけだと思っている。そう言えば、引きこもりの人の多くが、何かこだわっている対象があるのではないか。それならこちらも、それに取り付けばいいことである。１つには、そのこだわりの活動をもっと充実させる手伝いをする。もう１つは、その夢中になっていることで人の役に立つ機会ができるように仕掛ける。引きこもりの人でも、その人がこだわっていることを接点にして関わっていけば、受け入れられやすい。

⑦これも共通項の１つだが、地域には**引きこもりの人をこじあけられる人が存在する**。全国各地で出会った。東京・江東区で地域活動の発表会が開かれた。発表したのは町内会長。老々介護の家に何度も訪れて、要介護の奥さんに会わせてくれというのだが、ご主人がそれを拒否。もし何かあったらどうしようと困ってしまった。そこで浮かんだのが、町内の世話焼きさん。彼女を同道したが、それでも応じない。仕方なく会長は帰ろうとしたら、その世話器さんが突如、相手の家に入り込んだ。止める間もなく、彼女は奥の間に到達し、そこで奥さんが倒れていた。急いで救急車を呼び、奥さんは助かった。町内会長は、「こじあけ屋さんのおかげで命拾いをした」と感謝していた。

⑧その人の環境という因子も大事だと思ったのは、こういう事例に出会ったからだ。マップを作っていたら、なぜかその地区は引きこもり傾向の人が多い。なぜかということになった。そこで気づいたのは、この地区はふれあいが低調なことだ。サロンも開かれていない。すると地元の人が**「昔は、あちこちでサロンが開かれていたんですよ。そう言えば、今引きこもっているこの人も、この人も、あの頃はサロンに参加していましたよ」**。

⑵「ゴミ屋敷」



①お分かりだろうが、３つのテーマの第１番目の論点は、いずれも、「本人の側からその問題を見る」というものである。ゴミ屋敷も同様で、まず本人はどうしてゴミを「大事に」（？）しているのか、彼らが「これはゴミじゃない」と言うなら、それを容認することから対応は始まる。**「ゴミ」を本人と一緒に振り分けていくのもいい。「あっ、それはゴミじゃない」と本人が言うのが何かを見れば、その正体がわかってくる。**

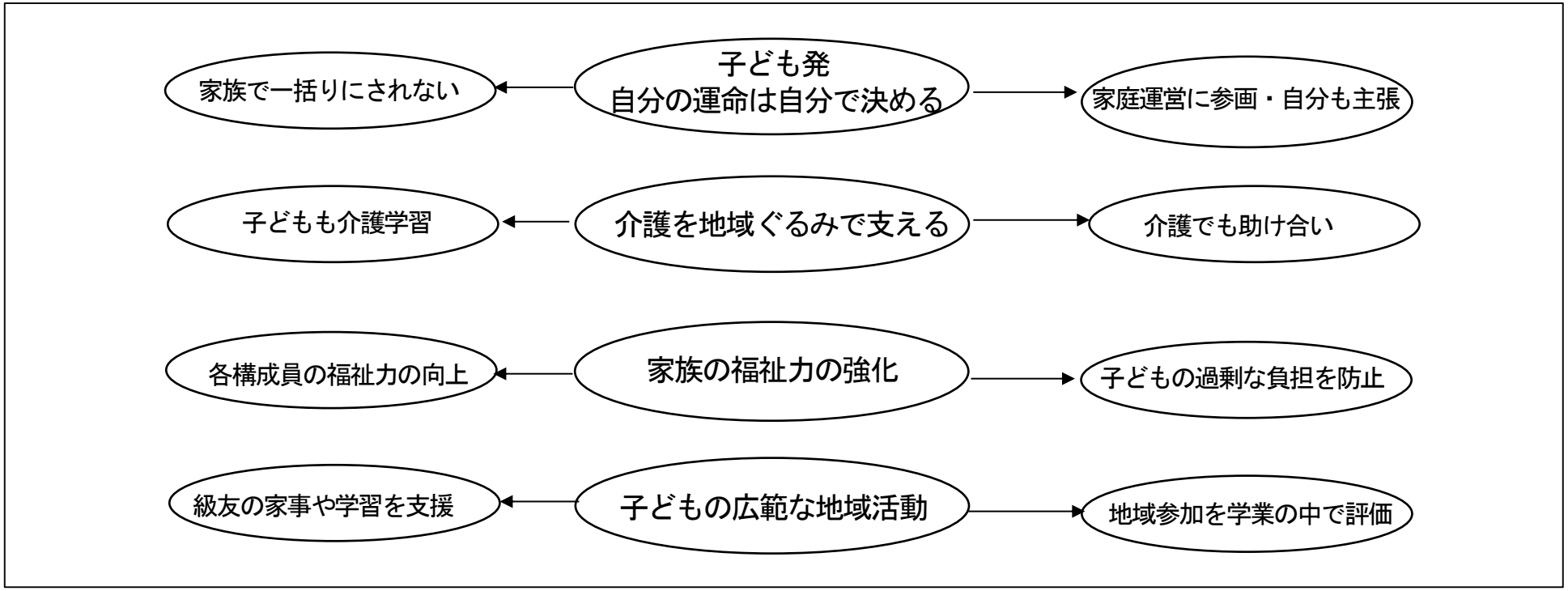
②積極的にか、やむを得ずか、とにかくゴミ屋敷になっていったプロセスを辿る。妻が亡くなってから気力が失せたとか。それを聞き出してから対策を立てる。ゴミ屋敷というほどではないが、それに傾き始めている一人暮らしの男性の理由を探ると、**透析の年数がだいぶ経って、体力が衰え、気力も失せてきたということがわかってきた。ゴミ屋敷の予備軍とも言える人だ**。

③このことも３つのテーマに共通しているはずだが、問題解決のカギを握っている誰か（本人が見込んでいる人）がいるのだ。ほとんどのケースで、この人が見つかる。だからその人を通せばいい。「いや、この人にはそういう相手はいない」と住民が主張することが多いが、それでも、何とか聞き出していけば、それらしき人は見つかる。**例えばあるケースでは、本人が見込んだ人はいないが、どういうわけか町内会長にはドアを開けるという。「私は町内会長だから、その役目で入りますからね」と言うと入れるらしい**。

④ゴミ屋敷の問題と言うと、地域福祉コーディネーターなどが、第１層を探して見つけた対象者に突撃するといった武勇譚をよく聞くが、一般論としてはこのテーマは、ご近所で取り組まれるものなのだ。なぜかといえば、**１回ゴミを片付けてあげれば終わりというものではなく、溜まり始めたらまた出動となるし、日常的な見守りや関わりが欠かせない**からだ。本人もそんな関わりを求めている。

⑤**これらの問題にはおそらく「解決」という終わりはないのではないか**。火は消えることはなく、残り火はいつまでも残っている。だから継続的な関わりが必要なのだ。

⑶「ヤングケアラー」



①いまはなぜか子どもの地域活動はほぼ全面的に免除されている。その中で突然、ヤングケアラーの問題が浮上した。そこで重過ぎる介護や家事の負担を強いられている子どものケースに焦点があてられた。まずはバランスのある議論を始めなければならない。

②全面免除の今でも、しっかりと子どもに地域福祉活動を担わせている親もいる。まずはこの点の確認が必要だ。同時に、大人の地域参加ももっと強

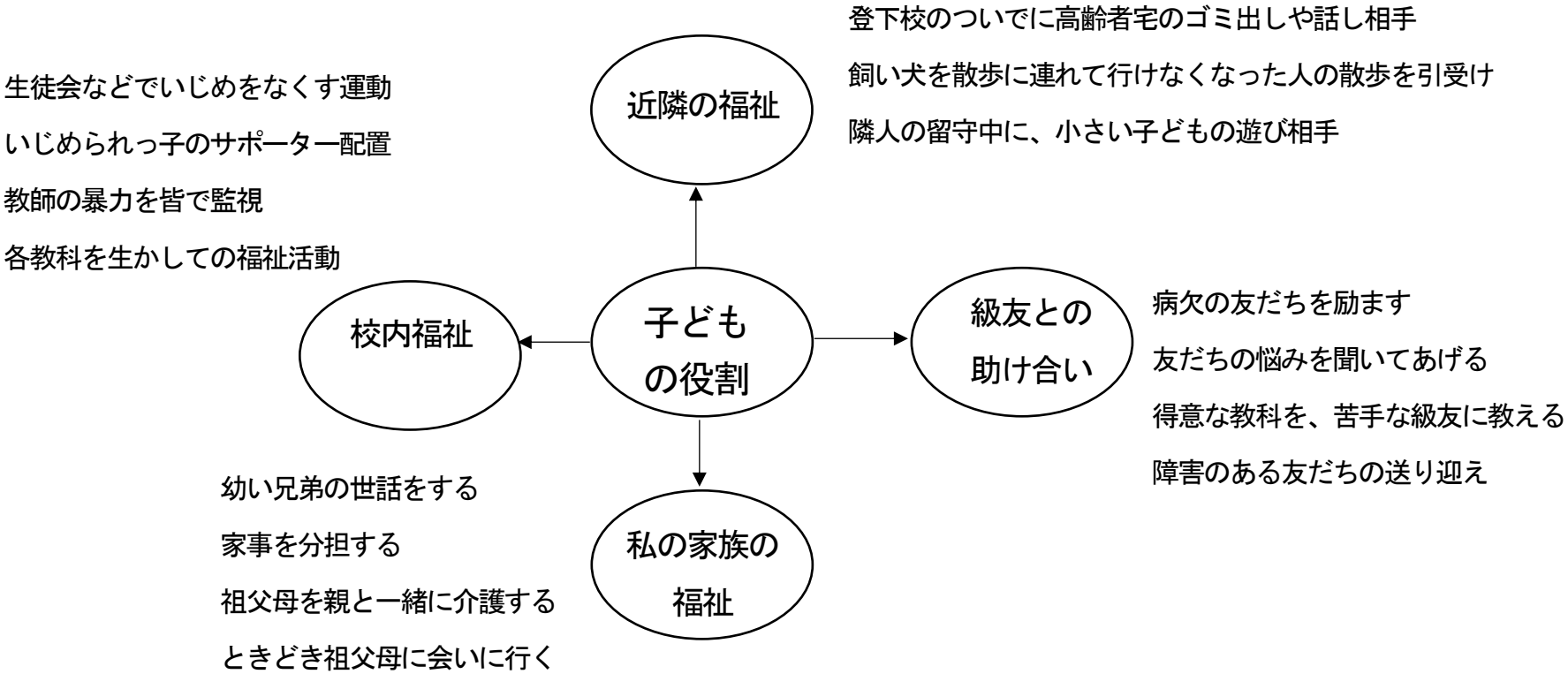
力に進めなければならない。英国の福祉機関が「あなたはこの１か月で人助けをしたか」という調査をしているが、日本は昨年、114 カ国中で 114 位、つまり最下位だった。過去１０年間の平均も最下位。これは日本にとって、国家的な危機とは言えまいか。

③子どもへの対応で今欠けているのは、**子どもの問題は子どもが主体となって考えるという基本だ。私は「子ども発」と言っている**。自分が過剰に家事や介護を担わされていると思ったとき、そのことをきちんと主張できるようにすることだ。

④超高齢社会になった今、介護は国民的課題になっている。以前は高校でもヘルパー研修がなされていたが、もう一度復活させる必要があるのではないか。**地域の助け合いの中に「介護」も加えるべき時期に来ているのだ。子どもの介護参加もその一環**である。

⑤家族の福祉力の向上も同様だ。家庭崩壊と言われる中で、このテーマはますます難題になっている。その対策を講じないままに、そのしわ寄せが子どもに向かっているからこそ、今回の問題が出てきた。**そこで生まれてきているのが、要介護者を含めた高齢者たちによる自助型の助け合いだ。**

⑥**ここで例示した子どもの福祉活動への参加が、今はどの程度行われているだろうか。苦境にある級友を助けることもその１つだ**が、現実はどうか。こういう問題とヤングケアラーは一体として議論されなければならない。


子ども
の役割
近隣の福祉
登下校のついでに高齢者宅のゴミ出しや話し相手
飼い犬を散歩に連れて行けなくなった人の散歩を引受け
隣人の留守中に、小さい子どもの遊び相手
校内福祉
生徒会などでいじめをなくす運動
いじめられっ子のサポーター配置
教師の暴力を皆で監視
各教科を生かしての福祉活動
級友との
助け合い
病欠の友だちを励ます
友だちの悩みを聞いてあげる
得意な教科を、苦手な級友に教える
障害のある友だちの送り迎え
私の家族の
福祉
幼い兄弟の世話をする
家事を分担する
祖父母を親と一緒に介護する
ときどき祖父母に会いに行く

2.福祉施策・事業に期待されること

これらの難問にも応えられる行政施策や福祉事業とはどういうものなのか。３つの難題の解決のための要件を整理してみた。

(1)担い手主導型と当事者対応型を併用という手法

①両者は完全なすれ違い状態

今の福祉は担い手主導型になっている。担い手が地域の問題を分析し、特定テーマに絞り、対策を構想し、システムや制度をつくり、人材を集め、教育し、組織化し、現場（第１層か第２層）に配置する。当事者は、問題ごとに指示された窓口まで出かけて行き、相談する。

ところが①難問の実態を見ると、当事者は担い手の指示に従うのではなく、自分が見込んだ人を選び、またはその人のいる所へ出かけている。解決の仕方も、自分が選んだ人に指示している。しかも自分が見込んだ人でないと駄目だというのだから、両者は完全なすれ違い状態だ。

この当事者の行動に対応したのが当事者主導型、つまり住民流の福祉なのだ。

②世話焼きさんなら「その人」に気がつく

引きこもり人の周辺をよく調べると、当人に見込まれた人がいるのに、その人がそれに気づかないというのが殆どだ。豊中市で起きた餓死事件を調べてみたら、１０名余の人が、本人からＳＯＳが発信されているのに気がつかなかった。たまに見込まれた人が気がつけば、結果は劇的に変わる。

あるコンビニに奇妙な客が毎日やってくる。顔はひどい厚化粧で、真っ白に塗られた肌に真っ赤な口紅。店主はこの女性が日常的に暴力を受けていると見破った。顔の痣などを隠すための化粧だった。警察に行くよう説得しても嫌がる。何度かそんなやり取りした後、これではらちが明かないと強引に警察に連れて行き、それによって問題は解決した。

餓死などのケースでは、接点の問題というのもある。たまたま接点にいた人が一歩踏み込んで動けば助かったのに、ということが非常に多い。残念ながら現実には、たまたま接点にいた人が世話焼きさんであった時だけ、救われる。あるアパートに住んでいる夫婦。夜、隣室で子どもが泣き叫んでいる。親がベランダにある洗濯機にその子を入れている様子で、ついに洗濯機がゴロゴロと回り始める音が聞こえてきた。これ以上放っておけないと、夫は妻に「警察沙汰になったら頼む」と言い残すと、ベランダの隔壁を破って介入したという。このように、悲惨な事件が防止される場合は、たまたま接点にいた人が世話焼きだったという幸運がある。

③地区内で当事者が行きそうな店等に世話焼きたちで網を張る

これまでのように、担い手主導のやり方にだけ目を向けるか、または**ある程度、当事者主導のあり方も取り入れるか。その場合、当事者主導の方は、どこの誰が対応するか。今の福祉関連の人材は、ほぼすべて担い手主導で固まっているから、住民の中でこの資質のある人を探す必要がある**。

あるスーパーに車椅子の客が来た。買う物をメモした紙を持っている。いち早く彼のもとに来たレジ係が、メモを受け取ると、店内を回って買う物をカゴに入れ、自分のレジに戻って会計を済ませた。そうして周囲のレジ係に向かって叫んだ。「みんな、こうやるのよ」。

当事者主導型の推進者が存在するとしたら、その人は当事者が来そうな地域の様々な場所―たとえば店などに行って、このような世話焼きのスタッフを見つけて、その人を重要な窓口に配置するよう、オーナーに働きかける。高齢の客などに慕われているスタッフは誰かと聞けば、わかるだろう。

また、ゴミ屋敷や引きこもりの人が見込んでいる人を探し出し（支え合いマップを使う）、この人と連絡を取り合う。第４層（平均５０世帯の「ご近所」）を基本に、当事者に見込まれた人で、地区全域に網を張るのだ。意外なことだが、福祉のワーカーは「世話焼きさん」のことを知らないようだ。これではどんなに立派なシステムを作っても仕方がない。

あるレストランに家族連れが来たが、スタッフの女性は、子どもの１人だけが何も注文してもらえず、ひどく痩せていて体に傷もあることが気になった。「助けが必要なら、サインを出してね」というメモをこっそりその子に渡すと、その子からＳＯＳのサインが返ってきた。彼女の通報でその子は警察に保護され、日常的に虐待を受けていたこともわかり、親は逮捕された。

問題解決のカギを握っているのは、ほとんどの場合、「人」なのだ。

⑵住民への福祉教育は自助教育中心に

①自助力のある当事者を育てる

⑤これだけ当事者の意向を大事にしなければならないということなら、むしろ当事者自身が自助力を強めてもらえばいいことではないのか。自分の困り事をどのように解決するか、だれにどのように支援してもらいたいのかは、まず本人が考える。前項の「網を張る」話で、それを誰がやるのかがはっきりしなかったが、当事者本人が「網元」になればいいことなのだ。

当事者の中に、助けられ上手さんと呼ばれる人がいる。こういう人と一緒に本人の自宅周辺のマップを作ると、自宅周辺の数十世帯の範囲に、何かあった時に飛んできてくれる人を何人か確保していることがわかる。この範囲を、私は「自助エリア」と呼んでいる。

自助とは、自力だけで解決することではなく、必要に応じて周りの人の助けを得ながら、本人が解決努力をするということである。助けられ上手になるよう、当事者を育てていかねばならない。それが果たせれば、自力で自分のための最強の支援者を確保できる。今は福祉関連機関で自助力の強化に取り組んでいる所はないだろう。担い手の養成一本のあり方から根本的に改めていかねばならない。

②小さい頃からライフデザインと危機管理。福祉教育の転換

本冊子では３つの難ケースを取り上げたが、難問であるほど解決は困難になるし、その理由を考えてみれば、本来はもっと早く取り組まれるべき問題で、今からできることが果たしてどれだけあるか、ということなのだ。外部からの関わりだけでなく、それ以上に本人の自助力がどう育ってきているのか。

危機管理―事前に備えるには、そういう資質が要るようにも思える。日本人はライフデザインができないと聞いたことがある。企業で社員向けにライフデザイン研修を担当している人に聞くと、例えば受講生に人生設計をさせるが、数年たつと、大抵の人はもうやめてしまっている。「どうせ将来

のことは分からない」と言うらしい。

一人暮らしの高齢者に自助マップを作ってもらっているが、その中で、いずれ要介護になる可能性は高いのだから、今から介護予防教室に出たり、自助エリアで介護人材を確保しておくべきだと言うのだが、あまり関心がないようだ。

⑶ハレ型活動からケ型活動への移行も

①世界一やさしくない日本人

英国の福祉機関・ＣＡＦが１０年以上続けている調査。「あなたはこの１か月で、見知らぬ誰かを助けたか？」。最近の結果を見ても、１１４カ国中の１１４位。つまり最下位だ。この１０年間の平均も、最下位。この数字はもっと深刻に受け止めるべきではないか。これは日本としての国家的危機だと私は思っている。この調査の特質が、「意向」調査でなく「実践」調査であるからだ。

②皆ができることをすれば、難問は相対的に少なくなるはず

もしかしたら、難問がなかなか解決できない理由の１つが、日本人の人材不足なのではないか。それも、何か難しい、専門的な技術の必要な活動ではなく、その気があれば誰でもすぐにできてしまうような活動がほとんど行われていない。**②誰もができる行為が、地域のあちこちでなされていれば、この人たちが、たまたま近隣に引きこもりの人とかゴミ屋敷とか、虐待家庭があれば、誰かが動き出すのではないか。**底辺があまりに心細いのだ。

特に小中学生などは、福祉活動の話になると、勉強や塾、部活でそれどころではないと反発される。１１頁で紹介した子どもの活動例にしても、以前はもっと盛んに活動がなされていたと思うが、一体どうなってしまったのか。**②子どもだけではない。主婦も高齢者も、会社で働く人も、それぞれが日常生活の中の接点でできることをすれば、難問は相対的に少なくなるはずである。問題が難問になる前に、近隣の小活動家の誰かがそれに対応するからだ。**

活動には、ハレ型活動とケ型活動がある。決められた日時に有志が集まって「さあ、やるぞ」というのがハレ型で、活動を推進するといえば、まずこのハレ型のことだ。一方で、普段の生活の中でなんとなくやってしまうのがケ型だが、このケ型が実践されていない。**③ケ型活動が普及していけば、人々はそれぞれ生活の接点で人助けをするだろうから、世界一やさしくない国から、ようやく脱却できるはずである。**

③実質的な推進者はお母さんだった

１１頁の子どもの活動例を見ると、日常生活の中でできることが並んでいる。もちろん子どもだけでなく、主婦や高齢者、企業やそこで働く人、地域グループ等が日常の中でできる活動例もある。これは地元のボランティアセンターの領域ではない。これを推進すべきは一体誰だろうか。地域で特に目に付くのは、お母さんの活動である。

知人の主婦から、小学生の息子の話を聞いた。「うちの子、ちょっと変わってるんです」。朝、通学班の集合場所で仲間が揃うのを待つ間、ご近所の一人暮らし高齢者宅を回って「ゴミ出しありませんか」と言っている。下校時もまともに帰ってこない。一人暮らし高齢者宅でお茶を飲んでくるらしい。当然のことながら、お母さんのやっていることはもっと凄い。庭を掃除していて、見知らぬ人が通りかかると「お茶を飲んでいきません？」。そうやって知り合いになった人が入院すると、見舞いに行く。その人が引っ越すと、引っ越し先にまで見舞いに行く。夫とは、結婚するときに「社会的に意義のある結婚生活をしましょう」と約束し合ったという。そこで決めたのが、毎週２人で老人ホームを訪問すること。子どもが生まれたら、その子もこれに合流する。その子が小学生になって、今述べた「ちょっと変わった子」になった。

石川県の七尾市でマップを作ったら、似たようなことをしている母親を２人見つけた。朝、子どもが登校するとき、「隣の一人暮らしのおばあさんちに寄って『ゴミ出しありませんか』と言うのよ」。もう１人の母親は、「道路のベンチでお年寄りが休んでいるから、『おはようございます』と言ってから学校へ行くのよ」。福岡県のＹ子さんは、姑の介護を２人の子どもに手伝わせた。年を取り、今度は夫の介護をする時も、２人の孫に手伝わせた。「〇〇ちゃんはおじいちゃんのおしっこ取り、××ちゃんはおじいちゃんの入れ歯洗いね」。その孫がこう言ってくれたとか。「おばあちゃんが寝たきりになったら、僕がおむつ替えをしてあげるね」。

つまり当事者主導の活動の場合、推進者は、足元にいる人なのだ。そして福祉教育は、学校の仕事ではなく、地域の誰かの役割なのだ。

⑷住民流とは「自助＋当事者主導型＋ケ型」。コロナにも強い

私が住民流福祉と言っているのは、この中の「自助」と「当事者主導型」と「ケ型活動」を足したものに最も近い。当事者主導型の説明を再読してみると、ほとんど自助の説明とも解釈できることがわかるだろう。そしてこのやり方だとコロナにも強いということがわかる。住民流は何よりも、担い手も受け手もまとめない、集めない。大抵は一対一の関係で福祉がなされる。だから密にはなりにくい。集まらないから、たしかに密の心配がそれだけ減る。そういう意味ではコロナが流行する今は、住民流を広げていくチャンスとも言える。

⑸社会福祉関連法がこだわる「尊厳を守る」超福祉へ

①もう１ランク上のレベルを目指さねば

④難問解決にもう１つの要件を加えるならば、「本人の人間としての尊厳を守ることができる解決策であるか」ということだ。社会福祉関連の法律にはすべて「尊厳」という言葉が登場する。あれは単なるお飾りではあるまい。うがった見方をするならば、この法律通りに実行しても、それでも今の福祉では、尊厳の保持は難しいですよと言っているのではないか。もう１ランク上のレベルを目指さねばだめだ。

④ここで紹介されている難題への解決策には、以下のようなことは取り上げていない。もっと上のランクの議論はまた別にしなければならない。

②「障害は才能だった」

自閉症の若者たちがイスラエル軍の情報部隊に配属されて、航空写真の分析を行うアナリストとして活躍している。私たちにはただ点としか映ら

ない対象を追って、敵の動きを察知している。これで何人もの味方を救っているのだ。自閉症の人は、細かい部分が気になるという特性がある。その「気になる」ことを１つの能力と見て、仕事に生かせる環境をつくっているのだ。こうした能力は、最近では特にサイバーセキュリティ業界で重宝され、オーストラリアでは防衛局のサイバーセキュリティチームでも自閉症の人が働いている。今では世界の多くの企業が「障害特性を生かす」というキーワードでこれに力を集中し、利益を上げているのだ。

③普通よりもはるかに高いレベルの資源を投入

障害関連としては、フェアネスというキーワードもある。有名レストランのシェフなどが協力して一等地に高級レストランを開店し、そこで障害者が働くなど。社会の超高級資源を障害児に投入するのだ。

一般的に福祉の対象者には、はっきり言えば、普通のレベルよりちょっと下程度の資源をあげればいいと思われているが、今広がってきているのは、普通のちょっと下どころか、普通よりもはるかに高いレベルの資源を投入するという発想なのだ。欧米では、フェアネスと言っている。大学入試で、黒人など社会的に不利な状況にあるマイノリティの学生には有利な点を賦与しているのもフェアネスだ。

残念ながら、日本にはこの発想がないので、これがなかなか理解されない。柔道がオリンピックに組み入れられたとき、世界はどうしたか。階級制を導入した。百キロの人と五十キロの人をたたかわせるのはアンフェアだというのが、フェアネスのある国の考え方だ。

④社会を変えねば実現しない

これらの発想は、福祉関係者が１人で頑張っても実現しない。社会が変えさせない。しかし興味深いことに、「障害特性を生かす」は企業間で広がりつつある。企業の福祉への理解が深まったというわけではなく、それが企業利益につながるからなのだ。一方で、福祉などの関係者にはこんな考え方がある。例えば嗅覚が特別に鋭い人を、嗅覚過敏の障害者としか見ない。しかし異常というよりも、人より優れて発達していると言えばいい。それを生かし、逆に生活で支障になる部分は対策を考えればいい。発達障害の人の中には、映像思考のため言語が苦手な一方で、脳内で図形を立体的に動か

して考えられる人もいる。今まではそれを障害と呼んでいたが、最近はこれを能力と認めるようになった。たとえば建築家の道でそれを生かせば、特殊能力になるからだ。日本でも、色覚過敏と言われてきた人が、色覚に秀でていることを生かしてゲーム会社で彩色を担当し、成功したりしている。